

国際スポーツイベントにおける学生ボランティア活動に関する研究  
—FIFA U-20 女子ワールドカップ ジャパン 2012 を事例に—  
Study of student volunteer activities at international sport events  
-A Case Study of FIFA U-20 Women's World Cup Japan 2012-

1K09A251-0

指導教員 主査 間野義之 先生

若月 翼

副査 武藤泰明 先生

【研究背景】

近年「ささえるスポーツ」としてスポーツボランティアへの関心が高まってきている。スポーツボランティアとは、旧・文部省（2000）によると、「地域におけるスポーツクラブやスポーツ団体において、報酬を目的としないで、クラブ・団体の運営や指導活動を日常的に支えたり、また、国際競技大会や地域スポーツ大会などにおいて、専門能力や時間などを進んで提供し、大会の運営を支える人のこと」としている。SSF 笹川スポーツ財団（2010）によると、2010年にスポーツボランティア活動を行った人は成人以上の男女の8.4%であり、1994年の調査開始以来最高の数値だったことから、スポーツボランティアへの関心が高まっていることがわかる。

スポーツイベントにおけるボランティアに関する先行研究は、山口ら（1989）が継続要因について、参加動機や満足度との関係性を言及している。また田中ら（2004）は、2002FIFA ワールドカップにおいて、ボランティア参加者の期待と満足に関して研究を行い、ボランティアにおける活動満足が継続意欲に繋がっているとした。

【研究目的】

上述した先行研究におけるスポーツボランティアは、参加動機や継続意欲に関する研究が多く、また当日のみ参加するタイプのボランティアに関する研究がほとんどである。そこで本研究の目的を、2カ月間など一定の期間関わるスポーツボランティアにおける学生への影響を明らかにすることとし、中でも、今後のスポーツボランティアへの参加意欲に注目することとする。また、FIFA U-20 女子ワールドカップ ジャパン 2012における学生ボランティアによる大会 PR 活動を事例として調査、考察していくこととする。

【調査方法】

・調査対象

本研究では、U20 女子ワールドカップにおける学生ボランティアに参加した東京ヴェニウの大学生5名から調査の協力を得た。調査対象者の内訳は、各大学を取りまとめる「学生リーダー」が2名（A・Bさん）、学生リーダーの下で活動する「企画メンバー」が3名（C・D・Eさん）である。

・方法

本研究におけるインタビュー調査の記録にはテーブルレコーダーを使い録音を行った。補足として、筆記による記録も用いた。なお、インタビューの冒頭では本調査の主旨を説明

し、会話を録音することの承諾を5名全員から得た。

・調査機関

本研究の調査期間は、2012年11月15日から11月29日とした。

【結果】

・結果1

B・C・Dさんは活動に対し満足感を感じ、今後のスポーツボランティア参加意欲が高かった。またAさんは活動に対し満足感を得ることができず、今後の参加意欲も感じられなかった。Eさんは活動に対し満足感を得られなかったが、今後の活動意欲はあるようだ。

・結果2

Aさんは今まで気がつかなかった自身の性格の新たな特性に気づきを得られた。Bさんは活動を経験することで、将来の夢が変わった。Cさんはボランティア活動においての問題意識を持つことの重要性に気づき、また多くの学生と交流し協働することで価値観の変化が起こった。D・Eさんについては、変化は見られなかった。

【考察】

・結果1の考察

B・C・Dさんに関しては、田中ら（2004）、山口ら（1989）、綿ら（1991）が、活動に対する満足感が高い方がボランティアの継続意欲が高くなると言及しており、今回の活動においても同様のことが言えると考えられる。Eさんに関しては、山口ら（1989）によると、「ボランティア動機の高い者は、活動の満足度にかかわらず継続意欲は高い」とのことであり、Eさんの参加動機や学習意欲の高さが影響したのではないかと考えられる。

・結果2の考察

Aさんは学生リーダーとしての経験、BさんはPR活動の成功体験と国際レベルのスポーツイベントへの参加、Cさんは他の学生との交流・協働などが学生の心理的な変化に影響しているのではないかと考えられる。

【展望】

自己の気づきや価値観の変化、今回のPR活動経験の応用など、学生が今回の活動を通して成長している様子がみとれる。今回のようなスポーツボランティア活動は、学生の成長の大きな要因となりえるのと考えた。今後はライフスキルの獲得の研究など、スポーツボランティアを通じた成長を測る研究がされていけばよい。